『華厳経』実践の一側面――『華厳経』霊験譚における病の記述をめぐって――

中西俊英（京都女子学園）

本発表では，学術大会のテーマである「仏教と病」にもとづき，『華厳経』における「病」にかんする記述，『華厳経』を受容した東アジア世界（中国・朝鮮半島・日本）における『華厳経』と病にかんするエピソードを検討する。

釈尊が相手におうじて法を説いて教化することは，名医が病気に応じて薬を与えることに喩えられる（「応病施薬」）。それをふまえ，衆生を済度する仏や菩薩を「医王」と表現する例が，『華厳経』においても確認される。

本発表では，まず，仏馱跋陀羅訳『華厳経』における「医王」とその治癒の対象とされる「病」について紹介する。具体的には，如来昇兜率天宮一切宝殿品や如来性起品における「医王」の記述，入法界品における善知識の弥伽（メーガ）や普眼妙香長者（サマンタネートラ）のエピソードなどである。あわせて，仏馱跋陀羅訳『華厳経』の注釈である法蔵（643-712）の『華厳経探玄記』も参照し，当時の中国における解釈例も確認する。

法蔵という人物は，『華厳経』のみならず『十二門論』の注釈書である『十二門論宗致義記』を著しており，『十二門論宗致義記』では『中論』『百論』『十二門論』のいわゆる三論に共通する思想内容として「二諦中道」を提示し，その内容説明で「観」という実践を指摘する。「観」の実践の第一は「病を識ること」であり，その「病」の内容としては，心のあやまったあり方や仏教にたいする誤解などを挙げている。

法蔵は注釈者としての姿の一方，『華厳経』をさまざまなかたちで信仰した人々の事跡を集めた，『華厳経伝記』という文献も編纂している。初唐の時代には六朝以来の説話集・霊験記等の集大成を試みる潮流があったと指摘され，その流れのなかに位置づけうる文献である。

『華厳経伝記』における病の記述は，霊験譚としての性格もあり，『華厳経』とは少し異なるものである。『華厳経』の講義を聴くことや『華厳経』を読誦することによって病が治癒した，といった内容である。ただし，『華厳経伝記』の記述は道宣（596-667）の『続高僧伝』などを参照しつつ，典拠となった僧伝類とは異なり，各僧が『華厳経』を奉じたことを強調するかたちに編纂しなおしている点には，注意が必要である。ちなみに，法蔵の門人である恵英（8C）が二巻に編纂し，のちに居士の胡幽貞（生没年未詳）が一巻にまとめた『華厳経感応伝』（783 年成書）においては，『華厳経伝記』内の『続高僧伝』を典拠とする資料は削除され，法蔵の事跡を中心に，他のエピソードも法蔵の生涯にあわせて年代順に編纂されている。

朝鮮半島や日本においても，『華厳経』と病とが関連したエピソードが確認される。たとえば，『三国遺事』は，憬興（7～8C）が病気の際，『華厳経』の「善友原病」（善友が病気を治癒する）を引きあいに，十一面の仮面の舞踏によって笑わせて病気を治癒したエピソードを記載する。また，日本では，聖武天皇（在位 724-749）の不予に際し，看病禅師らが蓮華蔵世界における時間の悠久さを説いた『華厳経』寿命品を読誦した，というエピソードもある。

このように『華厳経』における病の記述に注目した場合，『華厳経』そのものにおける病の記述，さらには，それを受容した東アジアの人々の実践がある。後者のなかには，『華厳経』の霊験譚を編纂する行為も含まれるであろう。

『華厳経』は事事無礙を説く経典として有名である。しかし，『華厳経』が今日まで広汎な注目を集めてきた背景には上記のような実践もあった，という点に，大会のテーマと関連させつつ，本発表ではあらためて注目をしてみたい。

キーワード：『華厳経』，『華厳経伝記』，法蔵